



## 発達障がいについて

最近、テレビや雑誌などで「発達障がい」という言葉を聞かれる事が多いと思います。けれども、「発達障がい」とは実際どういう事なのでしょうか？

平成16年に厚生労働省が「発達障がい者支援法」という法律を制定しました。この法律によりますと、『『発達障がい』とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障がい、学習障がい、注意欠陥多動性障がいその他これに類する脳機能の障がいであってその症状が通常低年齢において発現するもの』となっていますが、分かりにくいですね。

非常に大雑把に言いますと、赤ちゃんが大人になっていく間の変化を「発達」と言います。その発達のスピードが他のお子さん達よりゆっくりで、生活の中で周りの支援を必要とする事を「発達障がい」と呼びます。

発達障がいを説明する前に、「発達」について少し説明しようと思います。

### 「発達」とは？

発達と一言でいっても、大人になるまでにいろいろな面での成長が必要です。大雑把に分けると、「運動の発達」「手先の発達」「言葉の発達」「社会性の発達」などです。それぞれは生まれつきの能力によって伸びて行くスピードが異なります。そして周囲の環境からの刺激や経験により、発達のスピードが促されて行きます。

発達には順序があります。お座りができないのにいきなり歩いたりはできません。大事なものは、物事を身につけるには、その前の段階をしっかりと獲得していなければ、次に進めないという事です。勿論、発達には個人差があるので、多少の早い遅いは気にする必要はありませんが、遅れが次第に大きくなってくる場合は、発達に何か問題がある事が多いのです。

### 発達の障がいについて

ところで、発達障がいのおさんは、どの位いるのでしょうか。正確には分かりませんが、平成24年12月に文部科学省が発表した「通常の学級に在籍する発達障がいの可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」という長いタイトルの統計結果では、「学習面又は行動面で著しい困難を示す」子どもは、全体の6.5%とされています。つまり、普通学級30人クラスだと約2人の発達障がいかもしれないおさんがいる計算になります。そして普通学級以外の特別支援学級や特別支援学校に在籍している子ども達は、およそ1%と言われており、子ども達全体の約1割近いおさんに、何らかの支援が必要とも言われています。発達障がいを持つ子ども達は、

意外と多いのです。

では、発達障がいの原因は何なのでしょう？最初に書いた「発達障がい者支援法」によりますと、「脳機能の障がい」となっています。ではなぜ、脳の機能障がい起きるかと言うと、生まれた時に難産だったり未熟児だったり等が考えられていますが、生まれつきの事が殆どで、その原因は今の医学ではよく分かっていません。検査をしても異常が出てこない事が殆どです。

発達障がいを持つお子さんは、幼い頃にはとても育てにくいお子さんが多いようです。また逆に全く手がかからなかったお子さんもおられます。保護者の方は、自分の育て方が悪かったのかと悩んでいらっしゃる方も多いようですが、しつけや育て方のせいで脳の機能障がい起きる訳ではありません。勿論、誰かのせいでは全くありません。

## 発達障がいのいろいろ

発達障がいと一口に言っても、本当に様々です。これから主な発達障がいについて説明していきます。

### ①知的障がい

発達全体がゆっくりな事を言います。運動や言葉や手先の器用さも全部同じようにゆっくりと発達します。その発達のスピードが年齢の7割より遅い場合が知的障がいとされています。ただし、発達の年齢が実年齢の69%と、71%とで違いがあるかと言うと、実際には大きな違いは見られません。その理由は後で**発達障がいスペクトラム**についての項で説明します。

実は最初に書いた「発達障がい者支援法」の発達障がいの定義には、知的障がいは入っていません。知的障がいと発達障がいの間には少し違いがあります。知的障がいは全体の発達の遅れを言いますが、発達障がいは発達の一部分の遅れで、発達の凸凹が大きい事を言います。

### ②広汎性発達障がい

自閉傾向とも言われていた発達障がいの一つです。最近では自閉症スペクトラムとも言われます。この発達障がいでは、次の3つの特徴があります。

#### ㊸社会性の発達の遅れ

人との関わり方があまり上手ではありません。小さなころは、人への興味が薄い時もあります。他人の気持ちを読むことが難しく、相手を傷つけても気が付かな

い事がよくあります。また、周囲の状況を読めずに場面に合わない行動をすることがあり、言われなければ気が付かない事もよくあります。その他に人との適切な距離が取れずに、人の関わりを拒んだり、逆に人との距離が近すぎて、相手を戸惑わせたりします。

### ② コミュニケーションの発達が遅れ

おしゃべりや言葉の理解が遅い他に、指さしやジェスチャーを使い始める時期も遅れます。耳から入る言葉を聞き取って理解する事が苦手です。特に抽象的な概念を理解する事が難しいようです。それに対し、見て覚える事は得意です。早くから文字や数字に興味を示すこともよくあります。

### ③ 融通が利かない

記憶力がいい人が多いので、理解さえできれば色々な事を覚えるのですが、応用する事ができません。試行錯誤する事も苦手なので、一度失敗するとどうしていいかわからない事がよくあります。周囲から見ると、少し考えればわかるでしょ？と思う事でも手助けを必要とすることがよくあります。

以上の3つの特徴の他に、興味のツボにはまると、とてつもない集中力を示すことがあります。また感覚がとても鋭敏な場合もあります。

広汎性発達障がいの中で、先程の3つの特徴を特に強く持っている人を「自閉症」と言います。知的障がいがなく、言葉の遅れもあまりない人を、「アスペルガー障がい」と言います。また、知的障がいを伴わない広汎性発達障がいを「高機能自閉症」と言うときもあります。

## ③ 注意欠陥・多動性障がい

「AD/HD」と言われることもあり、自分の気持ちや行動をコントロールする力の発達が遅い障がいです。集中力が続かず、注意がそれたり、じっとしていられなかったり、感情のコントロールが難しかったりします。次の3つのタイプに分けられます。

### ① 不注意優勢型

集中力が持続できなくて注意が散漫になりやすいタイプで、人の話が最後まで聞けなかったり、最後まで課題をやり遂げられなかったりします。また、忘れっぽいのも特徴で、毎日何か忘れ物をしますし、無くしてしまうことも多々あります。比較的おとなしいお子さんも多いので、気が付いてもらえない事もよくあります。

**②多動性－衝動性優勢型**

とにかくじっとしている事ができません。座っていても、体のどこかが動いています。そして、興味のある事が目に入ると、衝動的に動いてしまい、危険な行動をしてしまうこともあります。待つことも苦手で、順番を守ることができません。感情の起伏も大きく、ちょっとしたことで激しく怒ったり泣いたりします。また、ハイテンションになりやすく、テンションが上がると、行動のコントロールがきかなくなってしまいます。周囲からはわがままとされているお子さんが多いようです。

**③混合型**

①不注意優勢型と②多動性－衝動性優勢型の両方を併せ持っているタイプです。

**④言語発達遅滞**

文字通り言葉の発達が遅い事が特徴です。次の2つのタイプがあります。

**①話す事だけが遅いタイプ**

しゃべる事は苦手ですが、言葉の理解は年齢相当にできています。友達と遊んだり身の回りの事も年齢相当の発達が見られます。

**②話す事と理解する事の両方が遅いタイプ**

言葉の理解ができていないと、話す事も遅くなります。このようなお子さんは、人との関わり方は年齢相当で、見て理解する力も強いので、言葉が分かっているように見えますが、実は年齢相当の言葉の理解ができていません。周囲の状況や人の動作を見る事によって補っているのです。分かっているように見えるのです。このようなお子さんは、普段の生活では不自由しない程度の会話能力を身につける事はできますが、自分の思った事を具体的に説明したりする事が苦手です。また、学校に入学してから、次に説明する学習障がいを合併するお子さんもいます。

**⑤学習障がい**

小学校に入ってから初めてわかる事が多い障がいです。知的な遅れはありませんが、他の教科はできるのに、字を読む事や書く事が難しかったり、あるいは算数だけができなかつたりします。また、言葉で考える事が難しいお子さんもいますし、文章を読み取る事や作文がとても苦手なお子さんもあります。特に文章を読み取る事が難しい場合は、国語以外の科目にも影響が及んでくる事があります。他の学力からみれば分かって当然なのに、怠けていると周囲から思われているお子さんが多いようです。

## ⑥発達性協調運動障がい

自分の身体を動かす感覚と実際の手足の動きが一致しないため、歩く・走る・ジャンプするなどの運動面が遅れたり、手足を同時に動かす協調運動（縄跳びなど）がうまくできなかつたりします。手先も不器用な事が多く、字をきれいに書けない、箸をうまく使えないなど、日常生活にも影響が出てきます。他の子ども達は何気なくできる事でも非常に努力しないとできない事がよくあります。また、体を支える筋力が弱い事も多く、椅子に座っていても、すぐに姿勢が崩れてしまいます。わざととしている訳ではなく、何かに集中していると姿勢が崩れていく事が多いようです。

主な発達障がいを書きましたが、他にも色々な発達障がいがあります。

## 発達障がいスペクトラムについて

実は発達障がいであるかないかは、はっきり区別する事ができません。発達障がいの特徴は多かれ少なかれ、みんな持っているものなのです。能力に全く凸凹のない人はほとんどいません。ただある程度の凸凹であれば、個性として社会の中で生きていけますが、凸凹の差が大きくなると、生きていく中で他の人からの支援を必要とします。そのことを「障がい」と呼びます。では、どこから障がいとなるのか、それは周囲の環境によって大きく異なります。ですから、障がいがあるかどうかのラインを引くことは非常に困難です。この事を発達障がいの連続性＝発達障がいスペクトラムと言います。

また先程書きましたそれぞれの発達障がいも全く別々ではなく、重なっていることもよくあります。例えば、広汎性発達障害に注意欠陥・多動性障害を伴っていたりすることがあります。学習障害に広汎性発達障害と発達性協調運動障がいの3つも併せ持っているお子さんもいます。つまり、発達障がいとは非常に個性豊かな人たちの集まりなのです。右の図は、解説しました6つの発達障がいのそれぞれを模式的に表したものです。

